

副業の奨励



* 滝口明城文庫398「山口県副業案内」のうち、「昭和初期の特産品分布図」
左；下関近郊，右；大島郡・玖珂郡・熊毛郡

解説

明治以降，経済不況は農村部の疲弊に直結しました。農村の維持のために，米作の技術（＝農法）改良や安定的な流通確保など種々の策が講じられましたが，一貫して呼びかけられた勸業政策が「副業奨励」でした。当初は，主要産物である米麦の生産を補強するため，特用農産物として茶・柑橘類などの栽培が奨励されました。なかでも有望視されたのが養蚕でした。

日露戦争以降は，「天産品」から「加工農産」など二次産品へ視線が注がれるようになっていきます。その後も，生産組合や販売組合の設置により組織的な生産が目指され，農村の強靱化が図られます。

1929（昭和4）年山口県内務部発行の『山口県副業案内』の巻末には7枚の特産品分布図が綴じこまれています。大島郡・玖珂郡の蚕糸，玖珂郡の産紙，下関近郊の蔬菜，熊毛郡の塩田，宇部近郊の沢庵漬，都市部近郊の畜産などが確認できます。

「天産品」主体の不安定な経済構造からの脱却を目的とするものでしたが，今日の「地域ブランド創出」と軌を一にする流れとも言えるかもしれません。

